

大地にふれる

真壁 伍郎

春先、庭や畑につもった雪がだんだんとけていくのはとても心はずむものです。そこで子どもたちとこんな話になりました。大雪だった何年か前のことです。

「雪ってどっちからとけていくんだろかね。上のほうからなんだろうか。それとも下のほう」  
長い冬のあとの太陽のぬくもりがうれしく感じられるころでした。

「下からとけるよ」

子どもたちの答えは、そろってこうでした。

「でも、お日さまがとかしているんじゃないの」

太陽のまぶしいような明るさと暖かさを感じれば感じるほど、太陽の光があたっている上のほうから、雪はとけているといいたくなります。それでも子どもたちは、下からを主張します。

わたしの幼いころもそうでした。春が近くなると、雪は大地に接した下のほうからとけて、つもった雪の下で、ちよろちよろ小さな水の流れをつくっていました。そして、つもった雪を取り除けてみ

れば、そこにはもう春の草が緑の顔をのぞかせています。まぎれもない春がそこにありました。

説明はどうあれ、雪は下からとけてゆき、春は湿った大地の底からやって来る。雪どけの流れる水の音を聞きながら、わたしはこれを実感していました。その水は、地下の深いところに通じてもいました。この思いは、いまの子どもたちも変わらないようです。

大地は生きていて、そこからのちを産みだし育てている。恐らく、土くれに息を吹き込まれているのある存在となったわたしたちは、母である大地の呼びかけに、無意識のうちに応じようとしているのかもしれない。

こんなことがありました。初めて鉱石ラジオを作った小学生の弟が、アースが必要だということで、空缶に土をつけて部屋にもっていき、それに線を埋めこんでいました。ばかだなあ、それはだめだよ、と、弟にいったものの、このときの一件は、いまでもわたしの心に残っています。

皆さんは、どうお考えでしょうか。空缶程度だからだめなのか。ビルくらいの大きさの入れ物に土を入れたら、それでアースになるのか。

答えはどれもだめなのです。地球という大地に接していなければ、アースの役割は果たせません。では、バケツに盛った土と、地球という塊の違いは何か。それはどうも、子どもたちが実感している地球の大地としてのぬくもりと、わたしたちがこの大地から生れ、その上で生かされているという、ごくあたりまえの、それでいてとても意味深長な事実とその答えがあるようです。

わたしたちは、大地に接していると身も心もくつろぎ、安心できるといいます。泥まみれになってけっこう喜んでいる子どもの姿は、人間本来の喜びの姿なのでしょう。大地と切り離され、高くなる

ろうとするだけの人間にストレスがたまるのは無理ありません。地球を自分の高さにもちあげることはできないのです。ならば、自分から大地に降り立ってみましょう。大地のぬくもりにふれてみれば、わたしたちにもアースが必要なことが、よくよく分かるはずです。

(新潟大学)

## 土いじり

——有田菊もみ修業に思う——

今井田 道子

目の前の作業台の上にドカンと置かれた土の塊り。「さあもんでごらんさい。」促されるままにそっと手を添えたその土は、心地好く冷たく、柔らかかった。自分で作った白磁の茶碗に自分の好きな絵付けをしたい、そんな一念で遙々と有田の陶芸作家の窯元に入れていただいた。八月の山峡の町は蒸して

